

近年、人間を含めた動物の社会的行動には、「オキシトシン」というホルモン物質が関係していることが分かってきている。このような研究に、実験経済学という経済学の一分野の研究手法が貢献していることを紹介したい。

オキシトシンとは、脳で作られるペプチドホルモンである。かつて、妊娠中や授乳中の女性だけが分泌するホルモン物質だと考えられていたが、近年の研究では、人々の信頼行動に関与していることが明らかになってきている。信頼は、人々の経済活動に不可欠なものであ

信頼行動とオキシトシン

ろう。そのような社会は貧しくなっていくのである。人々が、他人をどの程度信頼しているかを計測する方法として「信頼ゲーム」という実験方法がある。このゲームは、1990年代に実験経済学者たちが考えた投資ゲームである。

まず、2人の被験者が匿名の相手とペアになり、先手と後手に分かれる。先手と後手はそれぞれ1千円を実験者から与えられているとしよう。先手は自分の1千円のうち、いくらかをパートナーの後手へ送ることができる。先手が送ったお金は、実験者によって3倍にされ、後手の元へ届けられる。後手は届けられたお金のうちいくらかを先手に返すことができる。この後手の決定により、そのゲームでの両者の取り分が決まる。

先手からの送金は実験者によって3倍にされるので、先手が後手を信頼して思い切って送金することによって、2人で分けることのできるパイの大きさは最初の2千円(1千円×2)よりも大きくすることができ

る。しかし理論的には、先手は後手に全くお金を送らな

と考える。お金を送っても、後手が返してくれない。

アメリカの神経経済学者であるP・J・ザックは、この信頼ゲームを大学生に對して行い、ゲームの直後に被験者の血液を採取してオキシトシン濃度を計測した。その結果、後手のうち、先手から受け取った金額が大きいほどオキシトシン濃度が高くなるという結果を得た。また、オキシトシンの濃度が高い後手は、先手へのお返し金額も高くなる傾向があった。

つまり、先手から送金を受けた後手は、先手から信頼されていると感じ、脳でオキシトシンが分泌され、その結果、多額のお返しをしたと考えられる。ただし、オキシトシンの濃度が高い先手が、送金額を高くするという結果は観察されなかった。

「実験経済学」で 研究進む

る。互いを信頼できない社会では、新たな投資も起こりにくいだろうし、消費者は店で物を買わなくなるだ



名古屋市立大学大学院
経済学研究科准教授

濱口 泰代

はまぐち やすよ 実験経済学。大阪大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。博士(経済学)。1970年生まれ。

このような研究はまだまだ発展途上である。現在も、この研究結果を再現するための実験が多く行われている。実験方法の精緻化など、改善すべき点は多くあるが、人間の経済活動を生理学的なレベルから理解することは、人々の幸福に直結した経済システムを構築することにつながる可能性があるだろう。これからもうような学際的研究が発展することは間違いないと思われる。

